

# ぜいたくな空

はそべただし

わんさと  
雪が積もった朝に  
オトキさんは死んだ。

おはぎをとどけにいった  
となりの嫁さんが見つけたのだから  
ほんとうは夜のあいだに  
死んでいたのかも知れない。

電報で呼び寄せられた  
四人の子どもたちは  
いづれも遠い町にいて  
末期の水もとれなかった。

山奥の村から嫁に来て  
炊事とやら仕事ともめんがすり  
ごはんとみそするのほかは  
何ひとつぜいたくを知らない  
オトキさんだった。

子どもたちが  
どんなに町へ呼ぼうとしても  
一向に耳をかそうとはせず  
手をやいたすえに  
金やめずらしい食物や衣類などを送り  
せめてもの孝行としたが  
かけつけた家に

目をとじているオトキさんは  
相も変わらぬせんべいぶとんの上に  
もめんがすりをまとっていた。

マットレスは新しいまま

おしいれに積み重なり

着物は一度も手を通さずに  
タンスの中にしまつてある。

子どもたちは

むだな孝行に顔を見合わせ

はらをたて涙を流し

ふかふかのふとんを出して寝かし  
ありつたけの着物を取り出して

オトキさんを包んだ。

オトキさんは

初めてのぜいたくに

はずかしそうに  
ほおをうずめた。

翌日

降りたての

まあたらしい雪を踏みしめて

オトキさんの葬列は  
墓地へむかった。

まれにしかない

ぜいたくな青空が

盆地の上をすっぽりと  
おおっていた。

はそべただし詩集

「ぜいたくな空」より